

存在を、思ひ起さずには居られなかつた。

刺す蚊をば手に打ちかねて涙かな。

こうした氣持ちで、凡そ自分に與へられた運命なら、何でも甘受してきた。そして色々考へあぐんでは、結局もう此の上は、餘計な穿鑿はすまい。只自分に許された唯一の道に身命を捧けて精進すればそれでよい。一人きりにしてはせめてもの心やりとするのがオチだつた。今こゝに二十有餘才の春を迎へても矢張り昔乍らの私以外の何物でもないとしか思へぬのを淋しがらずには居られない。

あすならう日ごみ檜の夢を見て。

かうして今日は明日はこ一生を碌々として送つてしまふ様になつてゆくのではないかしらん。そんな不甲斐ない生活から逃れ出る事が出来ない自分だしたら？

私は自分自身を散々はちしてやりたい氣分で一杯になつた。餘りに靜かだつたお正月は却つて私に大きな憂愁を投げかけた。五時近くといふにもう日の光りの見られぬ此の薄ギタナイ町並をトボトボ歩いて居る内西方に明星の強くキラキラ光つて居るのを見た。急に身體中が清々するのを覺えた私は思はず「カアルブツセ」の「山の彼方に」を吟じてみた。するさすぐ、

たづねゆけ山又山を星一ツ。併し此の時又黒い影が心の中をカスめていつた。

三〇

ハーワード大學天

文臺の印象

ケムブリッヂにて 吉田源治郎

「古い！」こゝ云ふ感じが、ボストンのサウス・ステーションで山本一清氏の御出迎えを受けた時から、私の心に染みこんだ。これがオリバー、ウエンデル、ホルムスの誇る「太陽系の車輪」(ボストン)へ來た當初からの感じである。文明的の明るみの上に何だか古色蒼然たる氣分が蔽ひかぶさつてゐる。歴史のないアメリカの唯一つの歴史のある町！それがボストンだ。

ハーワードの天文臺の高臺を訪づれたのは八月二十五日の朝、臺内は其體中して人氣がない。山本氏の研究室の一隅に腰を下して、さて、つらつらと考へる。そこへ變光星のカムベル氏はいいつて來られる。山本氏の計算を手にして何か意見述べられる。三階造りになつてゐる臺内には、臺員一人一人に割り當てた部屋が、いくつもなくあつて、總計約四十人の臺員が活躍してゐる。その中、男子が五六人、あまはスツカリ婦人、その半分の以上は、五十を越したオールド、メイド、之れを引き廻して、研究の指揮をするのが年齢四

十にまだ手の届かないシャプレー臺長。「シャプレーには感心させられる」と山本氏が私に話される。二際の一隅の研究室から出て、臺内くまなく見せてもらふ。玄關の次の部屋は、天井がドームになつてゐる、昔子午線望遠鏡の据えつけてあつた所今は、社交室兼讀書室。何しろ天上の星の研究に携はる地上の花の多い此天文臺のここだから、平常の空氣の賑やかなこと、そして此部屋がそのチャットの旋風の中心地である！

その次の室は臺長の家に通ずる。そして、此處から、十五時のドームへの通路へかけて一面の書棚である。然し、本棚圖書の分類に何の系統も與へてないやうに、見える。天井から、書棚から、凡てが古色蒼然として私の目に映る。「古い！」「ミ云ふ心持が又ひしく、ミ私を包む」「此處の主義は人間本位積立金が何萬弗もあるのに、ライブラリーの整理などは第二にして、出来るだけ多くの臺員を雇ひ入れる。然も、給料の割安ですむミスたちを雇ひ入れる。望遠鏡も八十年前に買入れたものをそのまゝ、その裝置も凡て昔のまゝ、然し、その仕事から云つて、此處の天文臺は、世界に誇るに足る大きな仕事をやつてのける」と山本氏の註が加はる。實際、ライブラリーのだらしなき。階段の一隅、廊下の片隅、手あたり次第の所だ。雜然、紛然として無數の本が羅列してある。昨年、ヤーキース天文臺なごを覗いた目で此處を眺めるに何

だがアツシリヤのアシユルバニバルの書庫へ來たやうな「古典的」な味がする。

十五時の部屋へはひるドイツ製の古物、屋根の回轉も、その他の設備も凡て人力仕掛だ。此の望遠鏡は、京都のよりも舊式で、取扱ひ不便ださうである。然し、八十年前にはロシャのブルコワの天文臺と共に、世界一を誇つたものであるその功蹟の数々ある中に、土星の衛星の發見、火星の衛星の光の測定は、この老鏡の若きもの誇りの記録である。今では、眞面目な觀測には用ひないこのこと。

そこから階段を下りて、反對の方向に行く。蔓の葉のからむ弔橋式の廊下を渡るに、寫眞室の一棟がある。右へはいれば、天文寫眞及びそれに關するものの展觀室、月二回の公開日には、此處へ人々が雪崩れこむ。凡てガラス版に燒き付けたものを、枠にはめ、背後から電燈で透かす工夫になつてゐる。スペクトラムの色々、マゼラン大星雲、小星雲、月、其他、等等、が手際よく、四隅の壁際に展列してある。その奥の部屋が、寫眞保存室、何さなく大きな戸棚が並列してあつて、一々番號によつて創立以來此處及び、ペルーの出張所で撮影された寫眞が系統をつけて保存してある。之の仕事に臺員の方が毎日かゝつてゐる。寫眞の燒付、寫眞による星の計算其他。

二階建の此煉瓦造り建物の半分は、凡て臺員の研究

室作業場になつてゐる。但し、天文臺の本館は八十年前の木造である！)

此處に働く人々には、可なり變つた人がゐる。今は、外國人としては、オランダ人のライテン氏と山本氏のみであるが古株の臺員の中で

變つた人たちの一人二人を紹介すれば――先づ、第一にミスカノン。五年かゝつて星のスペクトラム二十萬を整理し、その出版に更に十年かゝつてゐる。此の老嬢が第一の變り者である。最初はその代理が出来た人はないと云はれる迄になつた篤學な女流學者。彼女に次いで、ミス・ウツツがゐる。此人は、エデプトでボストン博物館の日本部主任平野女史に出合つて以來同女史と親友になつてゐる。「それは、グリ／＼とした大きな目玉の人なのです、小さな身體でね」と山本夫人の註。ミス・ウツツは、毎日、平均一つづ、新星を發見するに云ふので有名である。彼女も又、二十年以上飽かずに毎日、星の寫眞を擴大鏡で睨んでゐる奇特な研究家である。ピケリング臺長(有名なジャマイカのピケリングの令兄で、此處の前臺長)も又この變り者の一人にはいる。彼の机は、是非この「博物館」的天文臺を訪ふ者の見通してはならない設計をもつてゐる。今日では、シャプレー臺長がそれを襲用して居られる。先づ、此處に、狭い研究室があるを想像してみて下さい。その眞

三二

中に柱が立つ。その柱を軸にして、ほゞこんど部屋をふさぐ程の圓形のテーブルが仕掛けてある。そして、柱をめづつていくつかの棚が車軸狀に配列される。臺長は窓際の明るい所に座を占めてゐる。扱て、彼は計算にまゐる。机がグル／＼と廻り出す、そして、ある角度を廻つた所で、ピタリと止まる。見るにそこは、變光星の部である。其他の部分を調査する必要がある場合――即ち、一旦緩急あれば、自分、坐つてゐるまで、テーブルの端に手をつけて、グル／＼と廻すだけの勞である。さうすれば、凡ての研究資料の備えられた机の部分が御用を承りに来る。但し、肘つきは禁物、ウツカリ肘をつけば、テーブルは、グル／＼と廻り始める。「大いに暗示的である。私も一つこんなのをつくらうと早速さう定める。

本館の外に廣い場面の星の配置を撮影するための一吋レンズの寫眞望遠鏡が備えてある。こんな建物がつつばかり、本院の西側にある。

此處では、あまり觀測には力を入れぬが、ペルーの出張所には、もつと完全な設備があつて、そこでは絶えず觀測や、寫眞撮影に従事してゐる。かのウィルソン山もカーネギー研究所が關係する迄は、この出張所であつたのである。いづれにもせよ、設備の不完全は、人の數とその努力で完全に償はれると云ふのが、此印象記の最後のモオラルである。

今一つ抜かしてならぬことは、此處の十五吋の望遠鏡及び

その設備は、全部、有志の手になつたことである。觀測室の壁上に、その由來が記してある。いくつかの天文に興味をもつ團體や個人の贖金が八十餘萬に之れを産んだのであつた。我々同好會員にして、十萬圓を投資する勇氣があれば最新式な『同好會天文臺』が日本にも生れ出でやう。

昨夜は、雨がしきりにケムブリツヂをふりこめた。そんな夜には、靜かな物語がふさはしい。それで、リンネアン氏の一隅、山本氏の假寓では、追懷談が夜半まで主客の間に交はされた。その中には天機洩らすには、時機尚早の日本天文學史の奇聞神話があつた。いづれ後年公けにささるる時であらう。山本氏は、一年足らずの滞在中、此の町及び、ホストンで、二回の試験の機會を與へられ、日本の天文學その活動一般狀況を語つた。私は、まだ檢閲を受けなひが、それをソツミ此處に披露しやう。一回は、冬の頃、ボストン市のシチークラブ、實業家や市内の重なる有志者、六百名位の前で、シヤブレー教授に次いで、日本の天文學その現勢を説き、是非に、『天文の研究は、國境を無視する。それは、コスモポリタンのコスモポリタンである。日本に於いて同好會が活躍するのも、私ひ天文教育に微力をつくすのも、その一つの理はこゝにある。もし活動の半分が、否三分の一が、心を宇宙の研究に、向けるならば、直ちに、今日のいやな、國際的紛争や人種的憎惡は、その痕を絶つであらう。天文の世界には、人

種の色別けは、無用である。これは、國際的協力と博大な人類的努力の對象としてのみ進められて行く最高の學術的境地である。……（此時拍手場を動かす）……シヤブレー臺長は、此の演説にスツカリ度膽を抜かれてしまつた。此れは僅に十五分の短い時このスピーチであつた。次に、されたのが天文臺主催の通俗博覽會での演説。こに角世界の天文學に關する協會で、一千二百以上を、しかも二年の短時日の間に得たものは、我が天文同好會の外に、極めて稀である。フランスに一つある外、大抵のものは、せいふ、會員二百か三百度さうである。『之れは互に世界の珍である』と同じシヤブレー氏が、演説會感嘆の聲を發したこ云ふ。我等の同好會の世界的誇りと責任を今更の如く感ぜずに居られない。ハーブード大學の天文學科の學生が僅かに五人あまり、之れは、全く今私の述べてゐる天文臺と關係なしに一つの少天文臺をもつてゐるが、それにしても、世界に名の響いた學者としては、あわれな景況である。それで、自分の所の天文學科から、天文學者を得られないで、よそから輸入してくるこ云つた有様だこ云ふ。アメリカがもつこ此の方面に『宇宙的』に大きく覺醒するまでは、他の國が國際禮讓の表示を促がしても或は徒勞に了るのであらう。此の印象記の結びとして、私は、ボストン公立圖書館の入口へ讀者諸氏を案内したい。ボーチをはいるこ、そこに第一階の廣間がある。そして、既に諸君は、

黃道の圈を足の下に踏みつけてゐるのに氣付くであらう。モザイリ風に、石だ、みの敷かれた中に、圓形に黃道のサインが彫られてゐる。エヂプト風の表現である。一寸、普通目にはない圖形がある。階上への階段に歩を移せば、此の館の誇りシヤバンヌの壁畫が目につく。ミューズの神が人生に光を與へるものを召し出す。それが、階段正面の大壁畫、そして左右の昇降口の上部の壁に、ミューズの招きに應ずる四つのシムボル、哲學、詩、歴史、天文を具體化した畫が、見る者の心を引きつける。向つて左のこちらから第二の壁畫は、「科學を表象するカルデヤ人の天體觀望の圖」である。見よ、三人の裸男が、原始的な小屋の前に或は立ち、或は、ひざまづいて、目を天の一方に注いでゐる、天文學のやりぎこが巧みに繪畫化されてゐる。三階に移る。此處は、藝術圖書館の入口の廊下。天井と四圍の壁畫が、例の喧ましい、サアサジャントの傑作である。北隅の天井を見上げるこ、そこに、恐怖の對象、モロクミ、優美の化身、アシタテミが相對して描かれてゐる。昔人間の幼なき子女をその生贅としたモロクの形相のすさまじさ。馬面のやうな怪相をもつた彼の頭上に黃道圈がめぐり、太陽が赫灼として照る。太陽の光線は、幾千の手となつて、彼の四圍に雨の如く伸びて地を惠まうとしてゐる。足下には、エヂプトのおまじないに用ゐられるスカラブ風のものが踏まへられてゐる。之に對して、金星女神アシタ

三四

ロテのやさ姿、空色の衣をまこつて、同じ色のスカーフ(?)のなびく裏側に世にも優美な天女たちが舞踊する。天來が、此壁畫全體としては、人類の精神的向上史のいく節、恐怖と暗黒と偶像の支配から、豫言者の啓示を経て、「悲しみの女たち」に「恵みのマリヤ」の對立、それから、人類の救へキリストの到來までを象徴的に描いたものであるが、往時の外道宗者の一例として描かれた天體崇拜の對象、モロクミアシタロテは見るものに一種異様な感銘を與へる。我等は、太陽をも解剖し、金星の祕密をもあばいて、宇宙の仕組みを雄々しく検討しやう。何しろ天井を照明する電燈の光が弱いので、明細な構圖の凡ては目にはいらぬ。「歸りませう」「大分目がいたくなつた」山本さん、私は、奴隷解放の偉人フィリッポス・ブルツクスの立像を訪ねる爲、圖書館に暇を告げた。(大正十三年八月二十七日朝、ハーヴード・カレデ、オブザベトリの一室にて)

○水澤緯度觀測所にて暫く風船觀測に従事してゐられた伊藤謙伍氏がこの九月から當天文臺の助手として來任せられた。